

『ぼくたちだって できるんだよ』

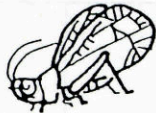
～ 働く喜びを遊びの中から・中央保育所 ～

「先生、草って生きもの？」「心臓がどこにあるん？」
 園庭にいる保育者のまわりにつの間に寄って来て、楽しい会話が広がっている。
 「ようがんばるね」「取っても、取ってもおいつきませんね」とフェンス越しに近所の方の挨拶も聞こえる。除草してもすぐに生えてくる強い草に生命力を感じながら……
 「あつ丸虫がおるよ」「コロコロしちよる」
 「はあ動かんようになつた」
 先生と一緒に肌を寄せ合いなが

ら、この家庭的な雰囲気子ども達にとつては最高にうれしいのである。草取り作業は辛いというイメージであるが、子どもにとつて苦にならないようである。幼児だからこそ、遊びに置きかえて取り組める、すばらしい能力の持ち主なのである。この時期をのがさず勤労意欲の芽を育てることが大切である。



「先生、きょうはよう草がとれる日じゃね」（経験のつみ重ねから）
 「あつ草がとれた、大きな草がとれた」
 「草とつたら大きな穴があいたよ」
 「かれーライスみたいなの、どろじゃね」



園生活の中での直接体験や感動物験を生かした、思いやりのある人間性豊かな子どもに育つことを願いながら、保育者同士

の共通理解を元に、やり直しのきかない大切な子育てに取り組んでいるのである。

俳句

清風句会

一人去り一人また来る芒寺
 渚打つ波音荒し芒の穂
 齊藤 元

日焼けして子等たくましく登校す
 かや刈りて屋根ふきかえの過去の家
 カリストに一望千里の花すすき
 石仏の肩を撫でよる芒の穂
 旧道の古き炭小屋鬼すすき
 風立ちてざわめく芒の穂波かな
 落日の人の恋しき芒原
 芒野となりて薄暮の風さわぐ
 選者追吟
 無月とてまずみ佛に香を焚き

岡本 長一
 潮田うしほ
 上利はな女
 大谷 ツネ
 二保 民子
 沖村美智子
 河野 文子
 西村美千代
 高崎はま子
 富田佳津美

短歌

三隅短歌会

汗ふきつ空眺むれば青くすみ青き柿の実も風にゆらぎぬ
 空いちめん撒けるが如き星くずの照り輝きて更けゆく山の上
 物干しをする庭先に風立ちてつくつくぼうしの秋を呼ぶ声
 田こぎして夜露の気配に急ぐ道一番星も添ひて帰りぬ

松野美津子
 平川 育子
 立間 雅子
 岡本 長一
 白寿にて逝きたる叔母の御みたま大きな星となりて光らん
 秋空の星の降り来て秋芳の野に咲きみつるせんぶりの花は
 秋の夜のふけてますますにぎやかにリーンリンリン虫のコンサート
 おさな子が指さす宵のひとつ星老ゆる命にしみてかがやく

伊藤 一郎